

# 着替えが不自由な高齢者のための普段着

プロダクトゼミ A2201125 福島成美

## 研究の背景

高齢化が進むわが国で要支援・要介護判定を受けた人は540万人いる。そのうち自宅で介護を受けている人は340万人、施設などで介護を受けている人の数は90万人となっている。要介護の判定を受けるとさらに、本人の日常生活を送る能力に応じて介護度が定められる。着替えや入浴が不自由な人は全面的な介護が必要と判断される要介護度3～4に該当し、その数は全国で約200万人となっている。

## 研究の概要・目的

一日の始まりと終わりに服を着替えることは、衛生の面においても、暮らしにメリハリをつけ規則正しい生活を送るためにも重要なことである。しかし、上記のとおり多くの高齢者が自力で服を着替えることができない状態にある。そこで高齢者の衣服を着替えやすいように改良することで高齢者本人と、介護をする人の負担を減らしてより日常を充実させたい。また、高齢者の身だしなみへの関心がリハビリの意欲向上や自己表現の積極性につながるなど「おしゃれ療法」への関心が高まっていることも考慮に入れ、機能性のみならず、高齢者が自分に自信を持って生活できるよう、デザイン性も兼ね備えた衣服を制作することを本研究の目的とする。

## 研究の進め方

市場調査      介護施設での聞き取り調査      デザイン      型紙作成      試作      考察

## 調査結果・分析

**市場調査**・・・現在市場にある商品の特徴・良い点・悪い点を把握する。

介護用に作られた衣服は病院・施設で着ることを前提にしているので、人と会うのをためらってしまうようなデザインが多い。

着替えを補助する際の利便性を追求してあるため、高齢者自身のアクションが少ない。

シニア向けの通常の衣服は、着替えの困難な高齢者には、着ることが難しいものが多い。

**施設での聞き取り調査**・・・グループホームさわら、グループホーム至福の郷、天心ケアハイツで介護や補助にあたっている職員の方や、施設を利用している高齢者の方に意見を聞いた。

半身マヒや指先の細かい動きができなくなるなど、市販の衣服では対応できない問題がある。

体型が変化しているので、ウエスト、ヒップなど全体的に余裕のあるものがない。また、あまり伸びない生地を使うと皮膚や服を傷つけてしまう可能性がある。

多くの要介護高齢者は椅子に座りながらズボンを履く。動きやすく、マヒ症状のある人や手先に力が入らない人のための配慮がほしい。

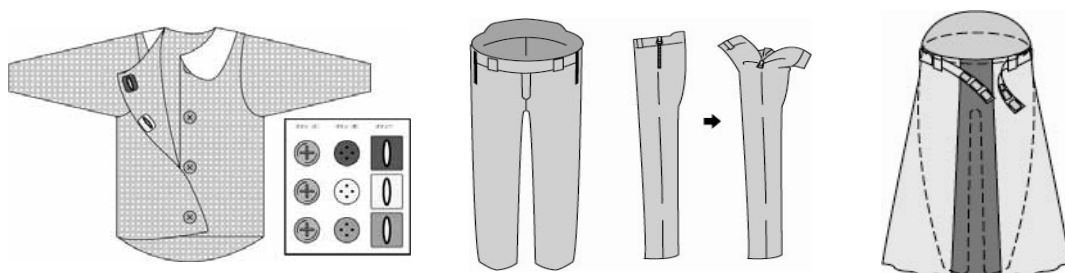
昔から着ている服や好きな色に愛着があるのであまり派手な色の服は着る気になれない。身の回りの小物や差し色は明るい色でいいが、普段着は派手すぎない方が好ましい。過度の装飾もケガや誤飲の原因になるので避けるべきである。

認知症の症状の悪化や機能低下を防ぐために、本人が自力でできる動作を最大限活かす。

**分析**・・・派手な色や装飾は不必要。座る、立ち上がる、歩行、トイレなどの動作の邪魔にならない動きやすい服装が望まれる。本人が自力でできる動作を活用することで、自信がつくと同時に認知症の進行を遅らせることにもつながる。また、日常的に着用して違和感のないデザインにする。

## 提案

現在実際に使われている衣服の問題点を改善できるデザインを提案する。女性用の冬用上着1着と男性用ズボン1本を試作する。



**女性用上着**・・・着替え時の負担を考慮した前開きタイプ。脇の部分が大きく開いていることで腕を抜く動作を楽にする。はっきりと視認できて扱いやすい大きいボタンを使用。また、ボタン裏とボタンかがりの色を統一し、赤ボタンと赤い穴、青いボタンと青い穴と交互に色を分けてある。これによってボタンの掛け違いを減らす。かがんだ時に背中が出ないよう、後ろ見ごろが少し長い。丸襟でシンプルなデザイン。

**男性用ズボン**・・・両脇にファスナーがついているのでウエスト部分が広く開き、ズボンを脱ぎ着するのが容易になる。ベルトループやチャック部分を再現し、介護用のズボンだとわかりづらくなっている。普段着として使えるデザインにした。

**女性用ロングスカート**・・・ロングスカートとズボンが一体になっている。見た目はスカートだが、履き心地はズボンなので保温性がある。ウエストはベルト風のマジックテープで調整できる。前後を履き間違えないように正面だけ違う布を使用し、デザインにアクセントをつけている。

## 考察・まとめ

私たちが普段何気なく着ているものでも、高齢者にとっては不便なことや使いづらいことが多く、なかなか自分では欠点や改善策に気がつかないことがたくさんありました。自分の考えや思い込みだけでなく、さまざまな人に意見を聞くことで、自分では気づけないようなミスや、もっといいアイデアを思いつくことができ、ヒアリングの重要性を改めて感じました。

お話を伺った施設でも、私が予想していなかった意見や、普段から高齢者に携わっていないとわからないような細かい意見を、親身になって丁寧にお話してくださいました。しかしグループホームだけに偏らずに、もっとさまざまな施設で意見を聞けばさらに良いデザインができたのではないかと思います。

また、テーマを決めるのがかなり遅く、全体的に焦って作業をしてしまい、試作も2点だけになってしまったので、もっと計画的に進めていれば成果も充実できたのではないかと後悔しています。

介護施設への単独訪問・型紙の作成・衣服の作成など初めてのことばかりの卒業研究でしたが、多くの人に支えられ、アドバイスや激励の言葉をいただきながら、なんとか進めることができました。2年間学んだことを最大限生かし、納得のいくものを作れるように、自分なりに頑張れたかと思っています。